



Title	ウイルトの長編英雄物語
Author(s)	ビビコワ, エレーナ A.; 山田, 祥子//訳
Citation	ツングース言語文化論集, 58, 9-11 佐藤チヨ演唱; 池上二良採録・解説; 山田祥子編訳; E.ビビコワ露訳; 津曲敏郎監修・序, ツングース言語文化論集シーゲーニ物語テキスト: ウイルト長編英雄物語ニグマー = « »: 北海道大学文学研究科, 2014, 258p, (ツングース言語文化論集 = , 58).
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/56214">http://hdl.handle.net/2115/56214</a>
Type	report
File Information	13bibikova_ja.pdf



[Instructions for use](#)

## ウイльтаの長編英雄物語

エレナ A. ビビコワ  
山田 祥子 訳

ウイльтаの民族芸術は、次のような口頭伝承に見ることができる。すなわち、サクリ [サフリ] 「おとぎ話」、ガヤウック [ガヤウ] 「なぞなぞ」、ニムガー [ニグマー] 「伝説、伝承物語、叙事詩」、そしてテールグである。テールグには、日常のテールグ [うわさ話など] と昔話 (神話や伝承物語と関連づけられる伝説) が含まれる。

ウイльтаの文化が発展してきた時代をとおして、うたい語り継がれてきたニムガーは、今日までも私たちの関心をひきつける。ウイльта民族にとって、ニムガーはきわめて重要な役割を果たしてきた。ニムガーの語り手たちは人びとから招かれ、あるいは語り手たちのところに人びとが集まって来ては、そこで語られる伝説に耳をかたむけた。語り手は名誉と尊敬を受ける存在だったし、彼ら自身、自尊と誇りをもっていた。私は [北のウイльтаの暮らしてきた] サハリン北部において、オシポフ・ミハイル・オシポヴィチ (ガヤガ)、マクシモフ・アレクサンドル・グリゴリーエヴィチ (ゲペゲ)、セミョーノフ・ペトル (アダク) という三人の語り手がいたことを知っている。だが、その語りを聞くことができたのはオシポフ・ミハイル (ガヤガ) だけだった。

池上二良教授と研究協力して初めて、私はキタガワ・ゲルグル [北川五郎] とナプカ (佐藤チヨ) という南のウイльтаの語り手たちのことを知った。かつてニムガーが語られたのは子どもたちの寝ている夕方から深夜までのことだったので、北のウイльтаの語り手たちのニムガーは幼かった私の記憶には残らなかったのだ。

池上教授との協力のなかで聞く南の語り手たちが語り伝えたおとぎ話、伝承物語、テールグなどは、自分の生まれた民族の伝承についての私の知識を豊かにしてくれた。ロシア語しか知らない同族の仲間たちのために、彼らが喜んでくれるようにと、私は池上二良 (採録) 『ウイльта口頭文芸原文集』をロシア語に翻訳した。

シーゲーニという中のくにの勇者に関する物語は、ナプカが語り池上教授が採録した口頭文芸のうち、最も興味深いものの一つである。シーゲーニはその妻である日の姫ニュゲルメクを追って上のくにまで旅をする。上のくにへ飛んで行き、ニュゲルメクと息子キールディンを自分の故郷である中のくにへ連れて帰る。

ここで読者に伝えたいのは、オロチ、ナーナイ、ウルチャ、ニヴフなどの諸民族と隣接したところに暮らすエウエンキーの人たちが、どうして「キッレー」と呼ばれたのかということだ。G. I. ヴァルラモワは「この語はエウエンキーの娘を意味する“キリウリ”という語に由来する」と述べている。シーゲーニの物語のなかで、主人公の妻は日の姫キリウリ、すなわち太陽の娘、花嫁であり、エウエンキーの叙事詩のなかで「すべてのエウエン

キーの人びと一すなわち中のくに“ドゥリン・ブガ”の住人たち、および彼らに嫁いでくる上のくに“ウグ・ブガ”の住人たち一は、“アイ（アイン）”と呼ばれる系統の一族を構成する。エウエンキー語のいくつかの方言で、嫁と母方の叔母のことを“ウイ”という。“ウイ”といえ、より物質的な意味として、他に「綱」とか「ひも」という意味もある（つまり、嫁というのは、中のくにの住人と上のくにの住人とを結びつける綱である）」という。ウイлта語においても“ウイ”は同様の意味をもつ。娘（キリウリ）は中のくにに嫁入りするため旅立つときに、そのような綱を下へおろして降りてゆく。シーグーニとニュゲルメクの子孫は母系の氏族の名をとって“ウギ”と名乗るようになる。これは「上の」、上のくに“ウグ”のことである。この語“ウギ”“ウグ”がかたちを変えて、“ウイлта”という語になったのではないだろうか。すなわち、“アイ”という系統の一族から“ウギ”→ウイлта、そして“キリウリ”→キッレー（エウエンキー）が出たのである。そのように考えれば、ウイлтаのニムガーが、どうして語りとうたという特徴を持ち合わせ、ウイлтаの語り手がわざわざうたの部分でウイлта語とエウエンキー語が合わさったことばで謡うのか、ということが理解できる気がする。

それにしても、物語のなかで、上のくにはその娘（キリウリ）、日の姫を容易には放さない。シーグーニの旅の途中で上のくにの英雄が立ち上がる。シーグーニとたたかったハウラニ（せりふの折返し句はノルゲール・ノルゲール）は敗北して死ぬ。シーグーニのところにはさらに上のくにの剛の者たちが次々とやってくるが、シーグーニは恐れることなく「毛皮の敷物ほどの大きさの小さな雲」に乗ってたたかいを挑む。だが誰も決着をつけることなく、逃げ去ってしまう。

シーグーニは中のくにへ帰って、自分の嫁である日の姫とともに暮らす。彼らの息子キールディンは成長し、名声は後世に広まった。中のくにで生まれたヌミシメ（せりふの折返し句はダーレール・ダーレール）は自分の空飛ぶトナカイ（せりふの折返し句はローレンテ・ローレンテ）に乗ってキールディンを連れ去り、自分のもとで養育するようになる。そこでキールディンはヌミシメの娘とともに遊びながら、成長してゆく。

しかし、上のくから敵たちがやってきて、ヌミシメの平穏な暮らしを妨げる。最初に小鳥の姿をとったチンダーニという悪霊（せりふの折返し句はチンダーニ・チンダーニ）に代わって、次にやってきた上のくにの英雄ムージャーニがヌミシメを打ち負かしてしまう。そこで小さな少年キールディンが英雄ムージャーニにとびかかり、たたかう。ムージャーニは刀を振り下ろして少年に切りかかるが、倒せない。キールディンは敏捷に跳びはねて攻撃をかわすが、彼も小さな少年にすぎない。

そのとき、地が揺れ動いて草の帽子をかぶった人が現れる。シーグーニの弟ギーワーニ（せりふの折返し句はニキ・ニキ・モーイ）が、自分の甥を助けるために立ちあがったのだ。

激しいたたかいの末、英雄ギーワーニは上のくにの剛の者を打ち負かし、ふたたび姿を消した。キールディン少年は養父であるヌミシメを連れて、実父シーグーニのもとへ帰っ

ていった。

成長したキールディンは、わくわくするような未知の世界を自分の目で見て、冒険をしたいと願うようになり、母親である日の姫に自分の知らない世界の話を聞かせてほしいと頼んだ。鳥や獣と同じように、キールディンも結婚相手をさがす年頃だった。どこかに美しい娘はいないのか？ 息子の思いを察した母親は「息子よ、待っていなさい」と言った。そして、9年間怠け者としてのらりくらしと暮らした後に平和を求めて英雄となった叔父ギーワーニが、甥であるキールディンに語り聞かせた。三つの海を越えた先にとっても恐ろしいワリサという化け物が二匹いる、一匹には19の頭が、もう一匹には13の頭がついているという。二匹のワリサはある美しい娘を地下に隠して、幽閉していた。「その女を助け出そう」と、ギーワーニがキールディンに言う、「勇敢な男たちが何人も助けに行ったが、誰一人生きて戻らなかったそうだ」。

ギーワーニとキールディンはその娘を救うために三つの海を越えた先の地へと旅立った。さて、その地に着いた。その地ではチョロロ・ナサカンという番人が二匹のイヌとともに見張りをしている。千里眼をもつチョロロは、ギーワーニとキールディンが向かって来ることを二匹のワリサにいち早く報告した。恐ろしいワリサたちは、「やつらが降りて来たらすぐに、イヌを放て」と命じた。

ギーワーニとキールディンは到着し、地に降り立とうとしている。チョロロはイヌを放った。イヌたちはすぐに殺された。ギーワーニとキールディンは、つづいてチョロロと13の頭をもつほうのワリサも殺し、ついには19の頭をもつほうのワリサの頭一つだけが残った。二人は残った一つの頭をたたき切ろうとするが、どうやっても死なない。二人は住居の裏手を探し回って、トカゲとヒキガエルで一杯のかごを見つけ出した。そのトカゲとヒキガエルを一匹残らず打ち殺すと、ワリサの頭も死んだ。かごのなかに、そのワリサの命が隠されていたのだった。恐ろしいワリサは跡かたもなく消え去った。

住居の裏で、二人はトナカイほどの大きさの岩を見つけた。キールディンはその岩を胸の高さまで、そして肩の高さまで持ち上げたが、前へ一歩、後ろへ一歩よろめいて地面に落としてしまった。その岩をギーワーニは胸の高さまで持ち上げたが、岩は手から滑り落ちてしまった。

ギーワーニはもう一度試してみた。今度は肩の高さまで持ち上げて、前へ三歩、後ろへ三歩よろめいて、岩を放り出した。その岩で隠されていた地下への入り口が開け、二人は美しい娘二人がいるのを見つけ出した。そのうちの一人はマーインといった。ギーワーニとキールディンは二人の娘をめとり、年老いたシーグーニと日の姫ニュゲルメクの待つ中のくにの故郷へと帰って行った。

終わりに、天才的な語り手であったナプカ [佐藤チヨ] さん、このような奇跡と伝説を記録に残してくださったすばらしい研究者、池上二良先生に、感謝の意を表わしたい。